



Title	『景社紀事』簡介および影印
Author(s)	堤, 一昭
Citation	懷徳堂研究. 2023, 14, p. 33-67
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/94540
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『景社紀事』 簡介および影印

堤 一昭

本稿は、西村天因が興した大阪の文会（自作の漢文を持ち寄り、批評する会）「景社」の規約・同人・例会の活動を漢文で記した『景社紀事』の概要を紹介し、その画像を示すものである。この『景社紀事』は同人らの手になる自筆原本であり、記載は明治四十四年（一九一）から大正五年（一九一六）に及ぶ。この時期に天因は懷徳堂の復興にむけて尽力していた。当時の大阪・京都の漢学・東洋学的主要人物の交流を知る手がかりとなる貴重な資料である。西村天因はじめ同人らの他の資料とも対照して、新たな知見を得る手がかりとなれば幸いである。^①

『景社紀事』は現在、大阪大学総合図書館の石濱文庫に所蔵される。石濱文庫は、大正から昭和四十年代初に活動した東洋学者・石濱純太郎（一八八八—一九六八）の蔵書ほかの研究資料を収める。彼は敦煌学、ニコライ・

ネフスキーと共に取り組んだ西夏文字の研究、富永仲基ら近世以来の大阪の学術研究などで知られ、一九五〇年には懷徳堂記念会の事業運営委員を委託されている。^②なお、石濱は天因の紹介で景社に大正五年四月二十五日から参加している。^③

二〇一八年十一月、石濱の没後五十年を記念する国際シンポジウムが関西大学で開催された。筆者はそこでの報告を依頼されたことを機に、同年八月から石濱文庫の未整理資料の調査を行い、彼の東京帝大在学時代の論文、その他の自筆ノート類とともに『景社紀事』を見いだした。報告の後、概要を「石濱文庫所蔵石濱純太郎自筆稿本類の発見―明治末年の「支那文学科」の学修、大正初年の「文会」の資料として―^④」で速報した。また、「石濱純太郎は、いつ内藤湖南に出会ったのか？―新出資料『景社紀事』の紹介を兼ねて―^⑤」では、『景社紀事』の記

述をもとに表1「景社題名に見える同人一覧」、表2「景社会合一覧」を作成、掲載した。その後、関西大学の研究者との「内藤文庫および石濱文庫所蔵資料の調査と整理に関する共同研究」により『景社紀事』を撮影し、ここに画像を公開することを得た。⁶⁾

『景社紀事』の概要は次の通りである。

A. 体裁

縦二五cm×横一七・五cm 紙縫綴じの抄本一冊。表紙除き三九葉だが、書き込みがあるのは最初から二九葉まで。葉数表記なし（以下の葉数表記は、筆者が本文の一枚目から数えてつけたもの）。表紙左肩に外題「景社紀事」直書（本文との比較で西村天囚の書と分かる）。本文は青い罫の「景社文稿」原稿用紙に、墨書（一部朱墨、朱印あり）。二九葉裏には、以下の三紙が挟み込まれていた。①「景社文稿」原稿用紙に記された会合記録の書きかけ1枚、②巻紙に記された年次記録の草稿らしきもの（大正七年一月廿五日の少し前から十月にかけての月日が記される）、③味齋先生あて石濱純太郎書簡。

B. 景社同約（1葉表〜2葉表）

冒頭に「景社同約」と題され、末尾には、「明治四十

四年辛亥二月社末西村時彦識」の識語がある。行を変えて1葉の最後まで朱墨の同筆で小牧櫻泉の社約についての発言が引用され、2葉表の冒頭からの附記の最後に「大正乙卯一月邨彦又識」とある。

C. 景社題名（3葉表〜5葉裏）

同人名を列挙した「景社題名」には、二七人の氏名や通称、字号、出身地、入社年月、入社時の年齢、住所が順に記される。なお、29葉裏には、狩野直喜ほか六人と小牧昌業の計七人の氏名と住所が記される。「景社題名」の部分と4人が重複する。29葉に記載の人物も含めると全体で三十人について記されている。

D. 景社紀事（7葉表〜28葉表）

「景社紀事」は本冊子の題名であるとともに、毎回の幹事（各回の末尾に「幹事某某記」とある）がまわりもちで担当した会合の記録である。冊子自体も次の幹事へ回されていったと考えられる。記された最後の幹事が粗山逸であるのに、石濱の手元に『景社紀事』が残った理由は未詳である。記された会合は合計二六回。

以下、表紙から記載のある最後の29葉まで、および上述の三紙①②③の画像を示す。



表紙

慕社同約
 文會友也。社何哉。某以同人皆希哲
 創。故。高慕賢之意也。每月一會。五日
 廟。賽日。輪次會集。同人之望。東。燭。夜。將
 又。宗。旨。存。切。制。不。在。飲。吸。之。以。主。人。供。食。蔬。藕。之。可。
 自。我。渡。勿。詳。駁。焉。志。士。素。香。本。拒。又。沒。懷。道。系。一
 篇。席。上。或。謀。以。一。小。品。互。相。評。陶。指。摘。疵。瑕。宜。直。會。
 不。宜。服。罪。師。心。自。有。言。無。意。欲。文。修。而。不。好。就
 出。者。猶。歎。窓。久。正。向。不。好。對。鏡。焉。抑。修。辭。之。道。要。在
 其。誠。立。辭。達。意。仍。有。物。非。愈。本。雖。文。不。能。大。筆。盛

表紙に返しし葉表

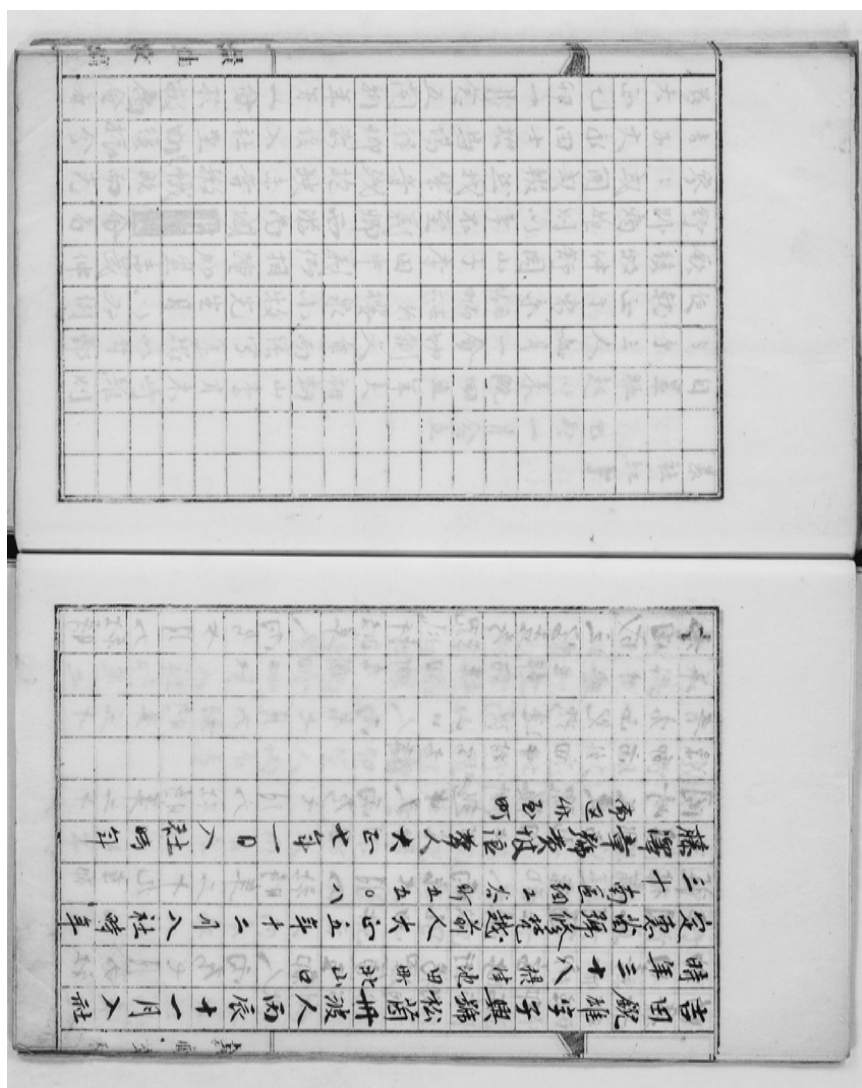
事。試何室。為。豐。志。尚。高。味。不。可。自。句。成。同。人。宜。不。
求。功。於。字。句。之。中。壹。志。于。道。養。其。根。柢。以。明。無。煙。牙。
其。之。大。堅。高。尚。明。治。卅。四。年。辛。未。二。月。社。未。四。村。時。
為。識。
小。校。櫻。衆。白。社。約。而。盡。結。書。數。淳。衆。降。聖。要。委。
觀。迎。來。稱。儀。文。名。多。不。滿。淳。衆。如。祠。誠。家。所。戒。迫。
請。治。如。說。布。律。有。之。今。後。某。社。係。君。文。修。辭。主。
誠。言。皆。有。物。尚。推。古。今。考。徵。文。獻。至。其。得。是。繼。筆。
有。獅。子。搏。兇。之。概。蓋。亦。志。獨。既。正。用。力。抑。振。政。路。
殆。豈。不。踴。躍。

前輩之法政中有規矩不可不曉味今均記于此
以志服膺堂教謹誌示予人其已曉名誦伯
大正七年一月
鄭孝文識

田中直	林	部	直	字	戒卿	號	秋江	西	年	八	分	年	亥	寅
區仙堂	孫	子	堂	主	品	有								
光吉	元	次	祀	子	孝	天	號	送	蒼	肥	前	人	今	年
或	郎	中	傳	四	下	之	唐	二	五	。				
馬	均	漢	文	松	文	當	得	卿	號	東	後	但	勢	人
東	所	堂	崎	四	村	主	士	三	條	社	宅			
永	田	源	明	當	士	昭	號	明	二	九				
勇	野	牛	神	田	所	七	九							
藏	澤	元	進	元	子	士	亨	號	蘇	鶴	隱	年	人	今
區	東	平	野	明	五	丁	目							

[illegible]

内藤	龍子	所流	湖南	陸中	人	西	辰	春	入	社	時	年	五
十一	重	部	主	田	所	未	景	微					
狩	野	直	表	子	溫	龍	山	肥	后	人	西	辰	春
四	十	九	京	部	田	中	村	子	大	溝	大		
富	岡	謙	茂	字	君	鴻	龍	挑	壁	京	部	人	西
四	十	京	和	室	町	中	五	堂	上				
破	野	性	秋	京	部	卿	號	秋	清	部	人	西	辰
石	渡	波	太	印	字	士	群	昌	率	人	西	辰	春
十	九	大	政	東	政	郎	景	江	村	室	千	體	
年	三	十	五	重	部	市	寺	田	明	生	湖	田	二
吉	赤	正	兒	球	達	陽	山	人	西	辰	七	月	入
皇	部	市	外	田	中	村	室	方	備				
國	崎	三	英	龍	機	越	中	人	西	辰	七	月	入
九	重	部	市	外	田	中	村	室	川	原	一	日	入
陸	松	翁	越	京	部	人	西	辰	六	月	入	社	時
龍	圓	吉	町	上	球	越	后	明	止	之	辰	十	二
神	國	寺	一	郎	宮	市	街	曼	慶	重	部	人	西
時	年	六	十	重	部	市	町	通	必	出	北	辰	十



5 葉裏の表紙

嘉社記事									
也即一月令立									
自嘉社起以奉既四年夫初柳山香月本寺雖									
以重三人每月一會如制文重而繕寫集綴以付部									
候就正寺書奉 ^無 明 ^無 證所櫻泉小牧先生月以倒									
歟後殿件舒同山子李田中義仍相贈如豐寺或仲									
野即商雖則以事不至義卿西遊而滅 ^用 命者									
參：或同義報然我輩皆踐於缺寺常撤職既而先									
寺子大永田士根馬場徑卿前後入社至 ^期 後極分									
嘉大正乙卯十一月念五朔年第一會於 ^期 為會者									

香才士格本本得柳及藤澤士多切内監師林子正
 不此以法日春俞研予綴入人及早九基寺有明
 了則也今今漢文大衆不能如幾今幸得同志以別
 其多是以載述同國皇宗文以式並日同人又目
 如左書留鴻社而與手稿後才
 時中宅記士想
 上樓殿尤中書子奉
 以醒錄子
 吉爾雅後三卿

註月版記柳
 記將士實儒事三
 圖文一即前論後記時多
 是日文均會又各出一題以爲集月花題目如左
 贈福惠狩軍殿時夫○時中宅日○該支那回
 陪却訴永岳試藝像會子奉○書史記後續
 僧後生入○傳爲胡論士想○夢遊月版記
 山○讀荀子五卿
 宿遊任女質擇但石必強作述是攝題亦琴媛但女
 會依出系一荷道如北○文○時支記

乙卯二月念三日申二會於天德堂廟之容廳是日									
後高命者西郡孫俊光吉母大永田士植林正正岡									
山子本及子六人薩沃士亨武內戲輝馬場滑折有									
事不至是日同人所據文稿如左									
與盧考教跋馬校									
讀支那内務部新語求魯或變									
此年宅記正									
為永浦草堂色花方派生才									
讀荀子主雅									

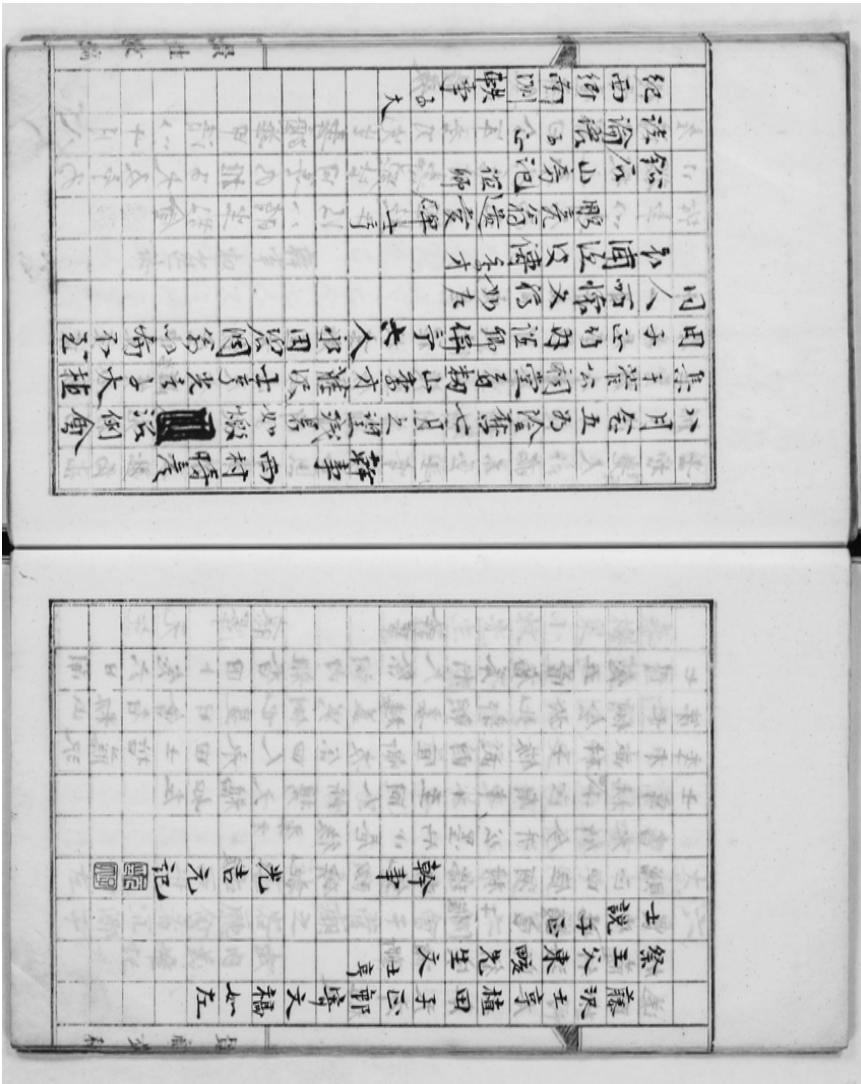
三月念五日當龍廟側祭是日士女紛羅至下午四									
時乃待候至西村士俊初山至才永田士植光吉子									
大竹同臣羽林正正及至士人殿相聚焉是為卯三									
序不至席此陽得御藤澤生才									
是時復慶叙子俊									
一附海常社記生才									
重蒙牛所派生才									
此年宅記正									

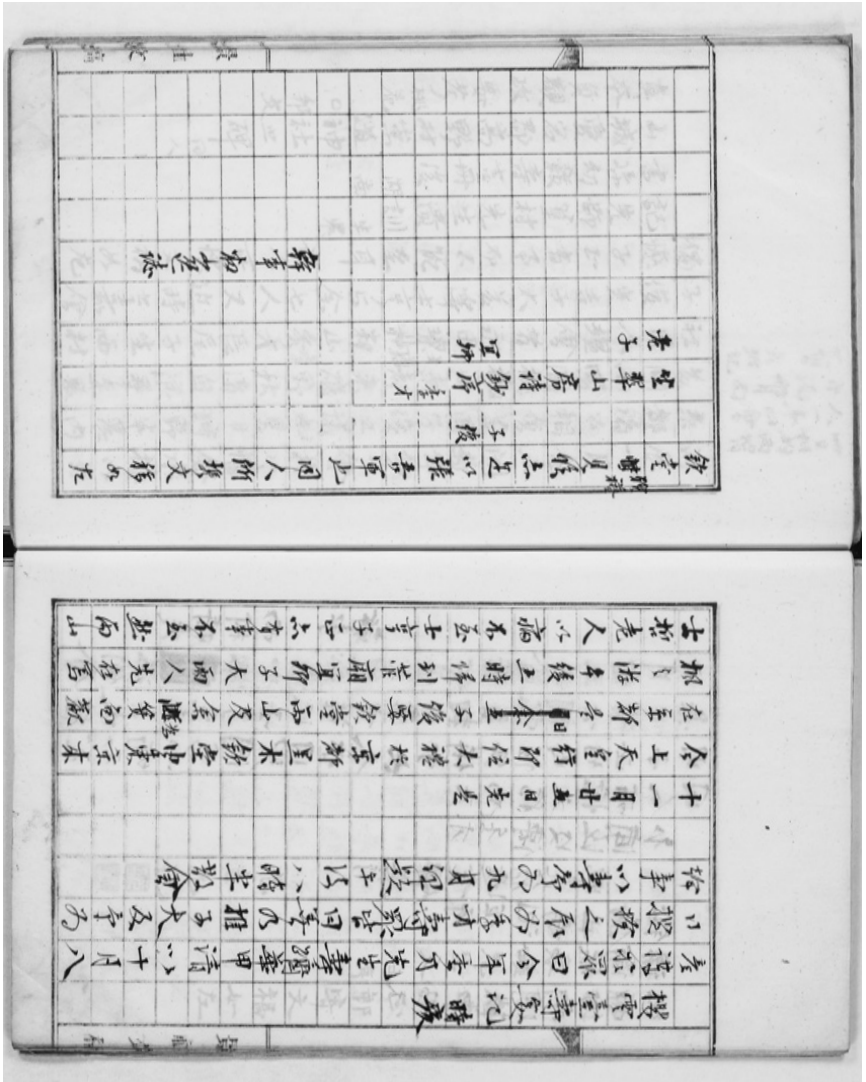
時乃叔山遊記

[illegible]

滋	月	微	記	五	鄉		
原	政	子	在				
韓	李	國	山	居	上	祀	
乙	卯	四	月	念	六	日	
開	牙	四	會	於	管	廟	
之	香	廳	是	日	會		
卷	西	村	子	淑	澗	山	
李	才	閣	山	子	志	武	
內	宜	炳	及	亭	園		
入	元	吉	世	大	市	不	玉
一	樽	酒	樂	社	祀	子	俊
飲	翁	禪	師	遠	事	才	
讀	司	馬	貞	補	三	堂	本
紀	五	卿					

全右百柳	六月念五閏第六例會子聖廟之容廳會暑直柳子	武内義雄記	大才才子俊又余是日暴雨衣袂盡沾而勢又如左	白菊樓記子玉	讀司勇種補三皇本記豆柳	日本外史評註自序子大	遊宇治記才	金陵函集引子俊	秦樓泉小牧先生書元
七月念五當齋奉行人祭祠內雜沓四十六日開	第七例會於北郭朝妻棲蓋吳例也是日會者柳山	李才西村子俊武内恒柳及余四人永回土塔藤沢	士亭桂環正有事不至同人所携又福如左	書水竹今并公墨竹小卷後尋才	贈西恒河村瑤軒紀切碑記子俊	買牛帖顯言子俊	加藤行海師行実冒柳	送岡山子本之奉天奉祝	最上牧齋





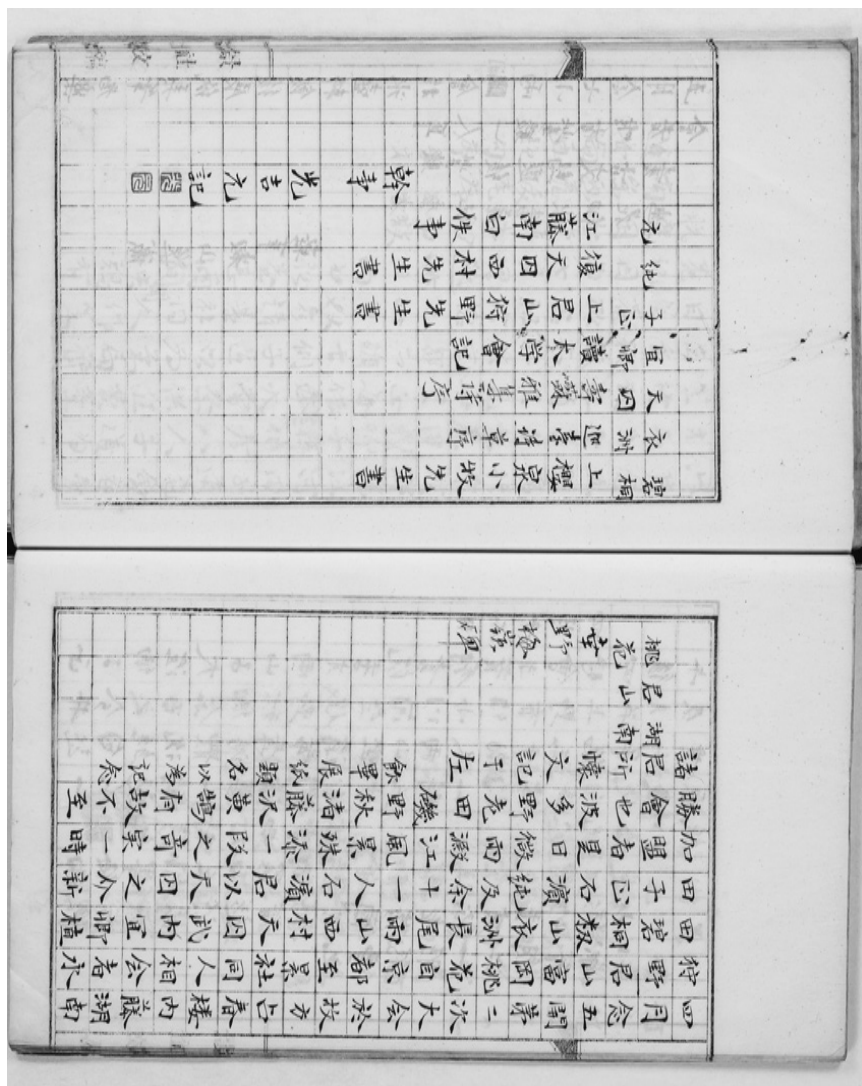
丙辰一月念五開新年第一會於八瀆金水樓以与	桑都涌と相會是園子俊之儀也是日將野牛農内	後用南園桃花由桑都來機靜林清自浪華至展	社同人埴會者永田環柳板山勢才尾子生西村	子俊生吉子大後峰士亨与余七人又此時並嘉會	楊憐子士者不記其年	託先師宣村先生遺訓生農	書添幼穉書言冊後附南	山城愛宕郡高野村常道神社	貞本貞觀政要考桃源
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社	○神社
○神社	○神社								

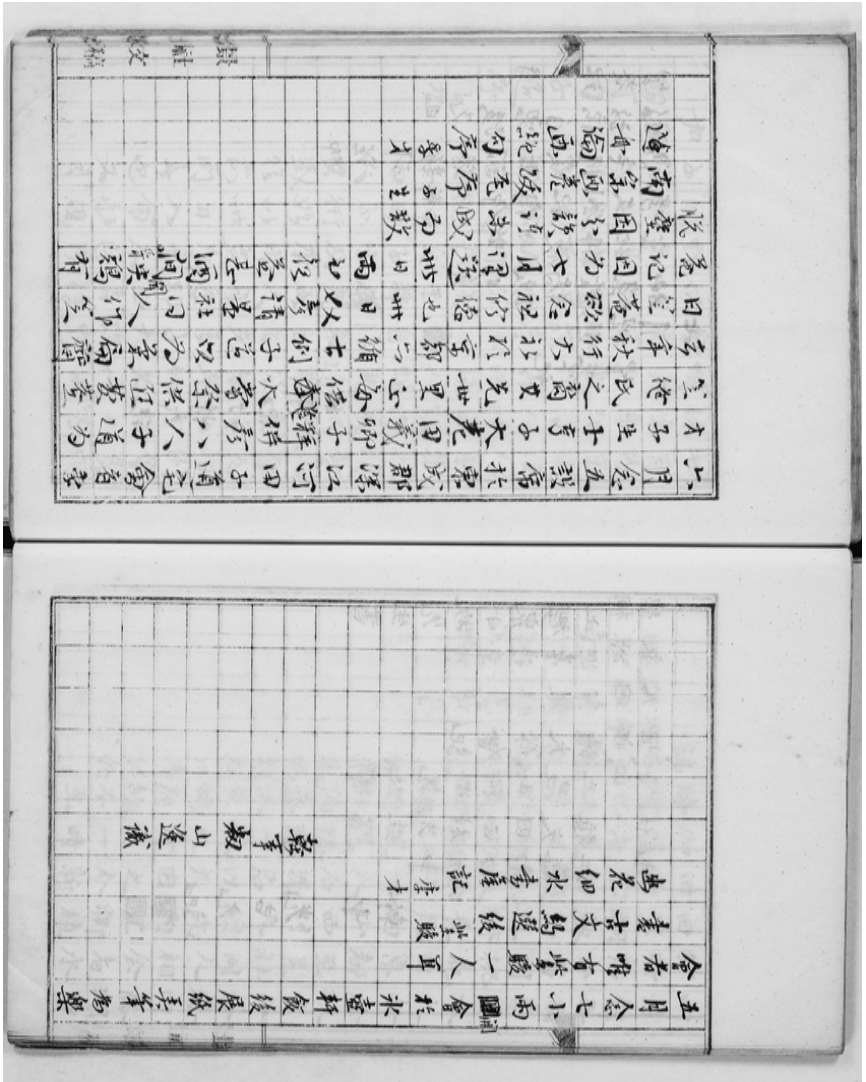


式内 宜御 郵寄 二篇 曰 老子 略論 典 藤澤 士
草書
警事 藤澤 元記

十 逢 三 時 脩 例 會 于 警 署 聖 香 流 朝 山 幸 才 及 多 野 士
清 磯 野 務 卿 長 宅 兩 山 麓 澤 士 才 以 肉 滋 卿 植 田 才
正 研 考 八 人
吉 吉 強 城 博 愛 二 大 子 後 幸 才
全 宜 周 治 尤 生 文 士 清
禰 清 八 吉 才 出 務 卿
壽 茂 事 引 西 山
復 近 御 元 才 古 御 幸 才 幸
先 大 此 事 晨 滋 卿

酒	夫卯山事上心	書	常與公字學肩輪後身	書	日發致曰均會心大車為宗旨茲六不何發	街	也濁月或洵二月臨時一會清社友海濱可發	皆	贊之因先清長先子生清以體詩以四月十二日	清明	所託海濱須撒門好酒子隨去未穩	所託	海濱須撒門好酒子隨去未穩
後	四時會于麓齋書院寺才兩山子大近御了心	及	表并上野市勾小川同些處野秋御舍而之今井	費	一等德三十餘人兩山遊清帝清體沈勉句起	原	成純句平律約一時三十分間清舉一酌起在一	紙	以為託念	昨	事西打時旁	之	日博文堂主諸卿會歸同溪石之外里後兩
獻	寶朋品一昨應事也	山	防竹書才際為簡費能皆起詩名一之張										
錄	計	收	納	納	納	納	納	納	納	納	納	納	納



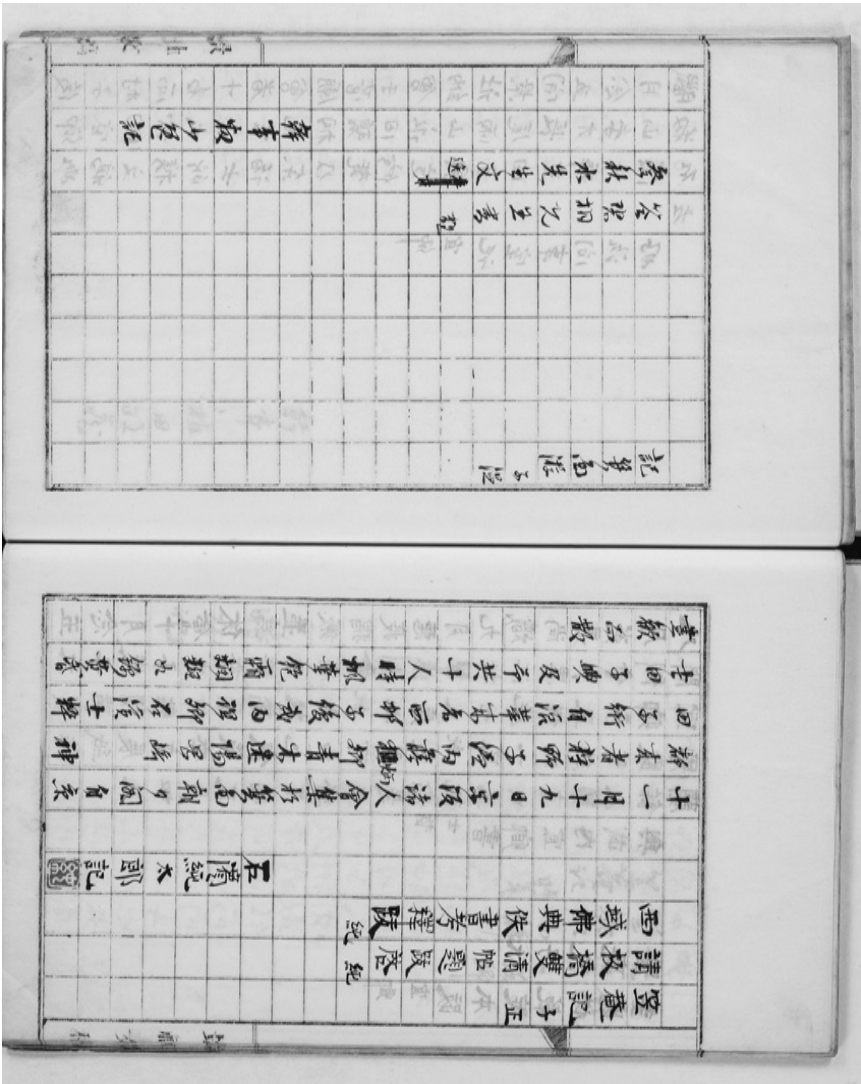


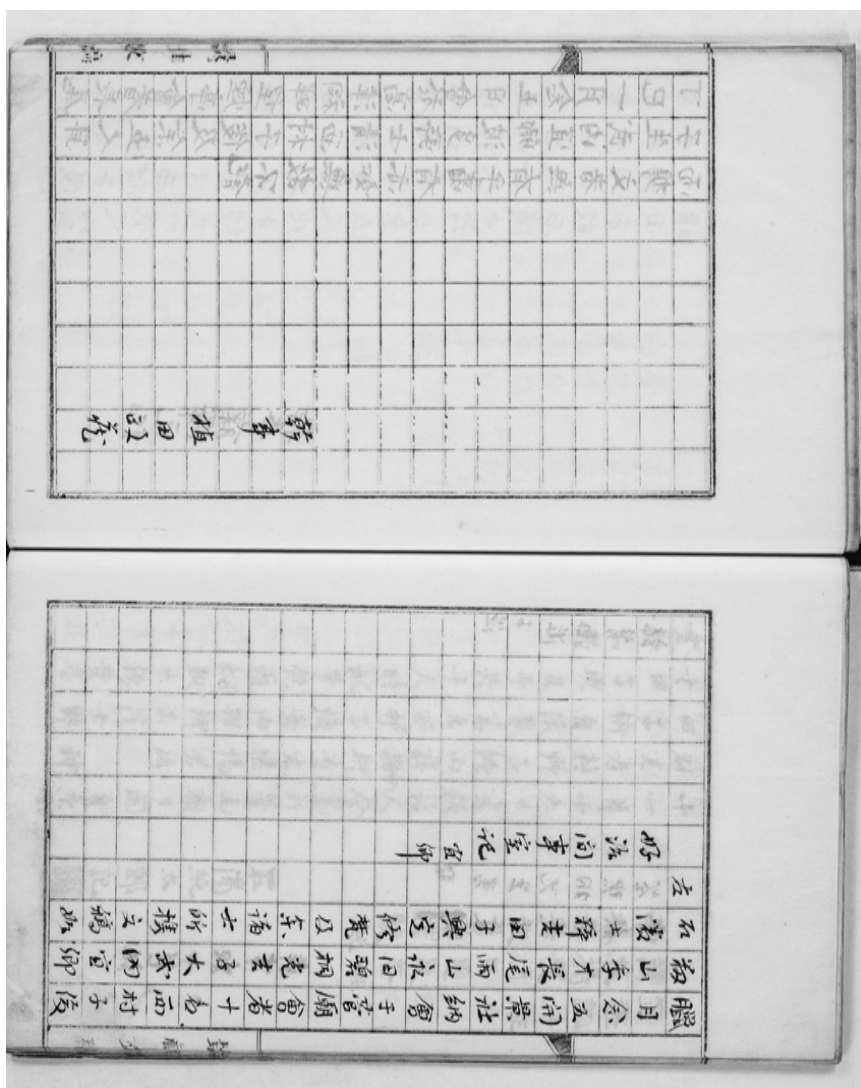
望菴記 王
 明政信 自署 為 日
 明年信矣 古 銅 蓋 類 引 証 師
 蒙文制記 自序 王 稱
 金姓丹說 王 稱
 仙系准 福 跋 明 表
 七月溫題
 生堂記

時 季 西 打 時 乃 記

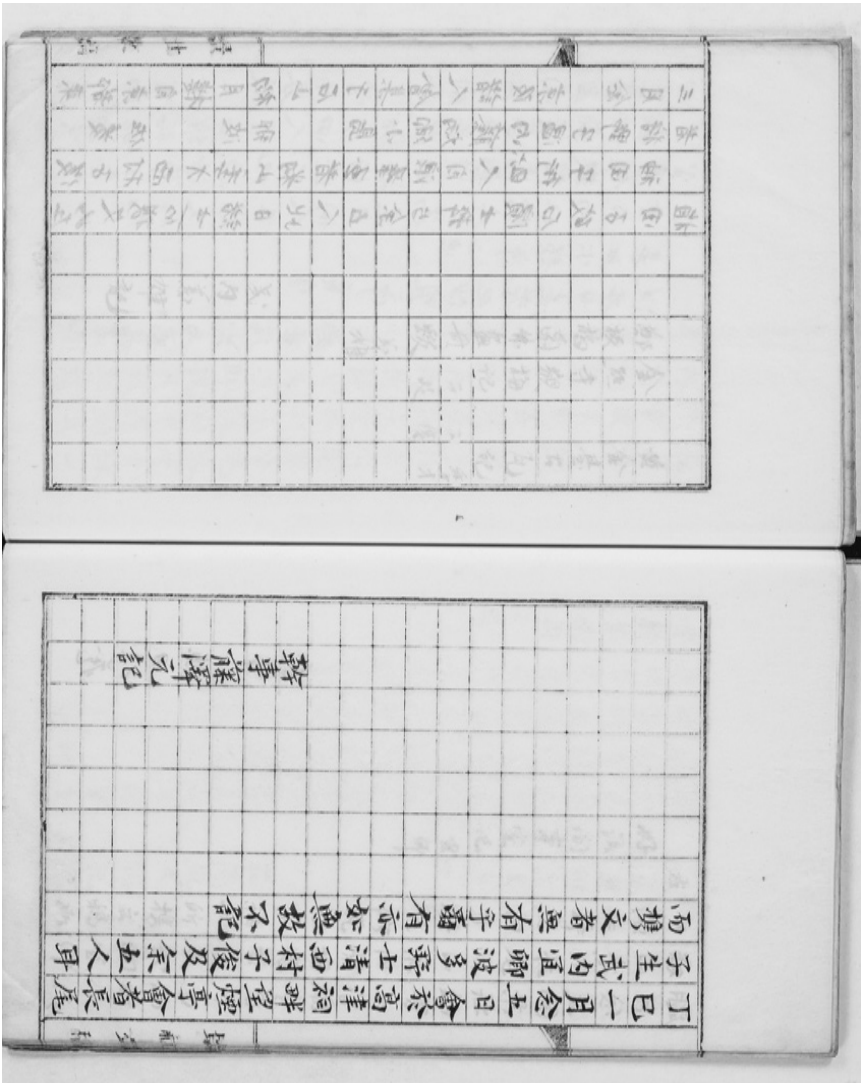
七月為京後日人會集之期會以各五例會夏期
 休沐節日人將西鼓曰鼓洞卿東生以十七日為
 明義散後并浴日人則亂自眾皆切拜仰又此日
 會王苑跡諒李綱代 自信聖王看光王太子大猷野
 以卿政內漢卿石侯王群 群美為人自至即右符
 野王臣內漢卿長生王生及本同京京本漢陽
 同時為史為族意起神田王行始以此日入會亦因
 王聖與月聖王總十四人其盛從前同寺也又自
 如左
 賜河田王進序王聖

八月災暑尚熾九月惡疫猖獗丑馬休會十月念五
 聞例會于墨江村翠瀟園會者士哲李才子俊子大
 匡卿子正伴絕亡人席上紙出板橋蘭竹帖請諸賢
 題跋皆約以一冊統之書可知也飯後李才展紙作
 蘭鉢入題言以為記念是日終不雨文目如左
 與武內宜卿書士哲
 密庵記子大
 手寫法範定本跋宜卿

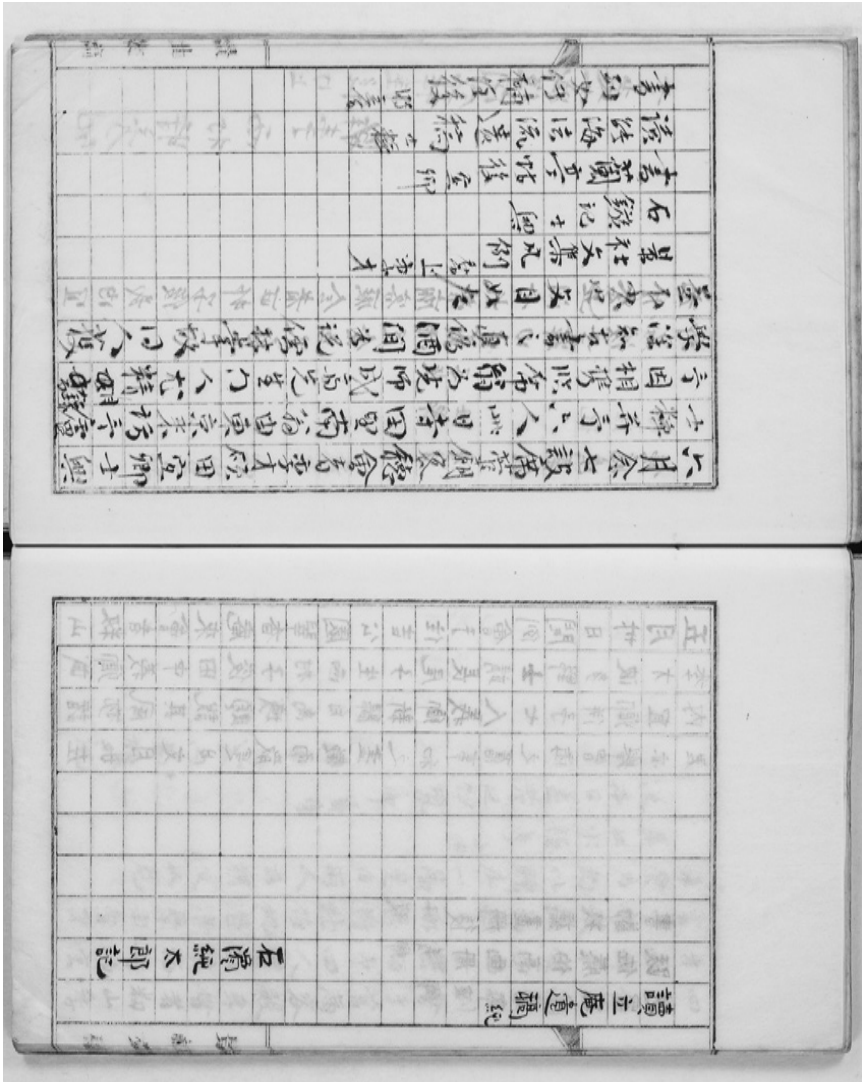


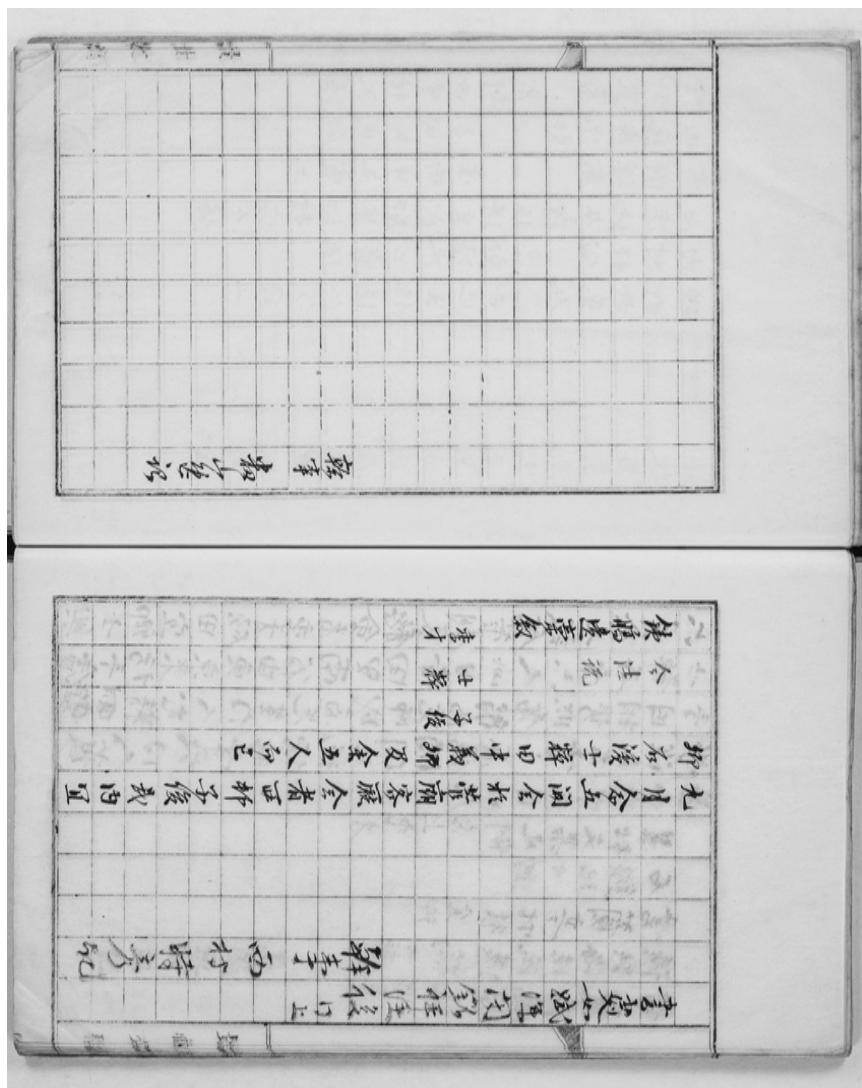


22 葉裏、23 葉表

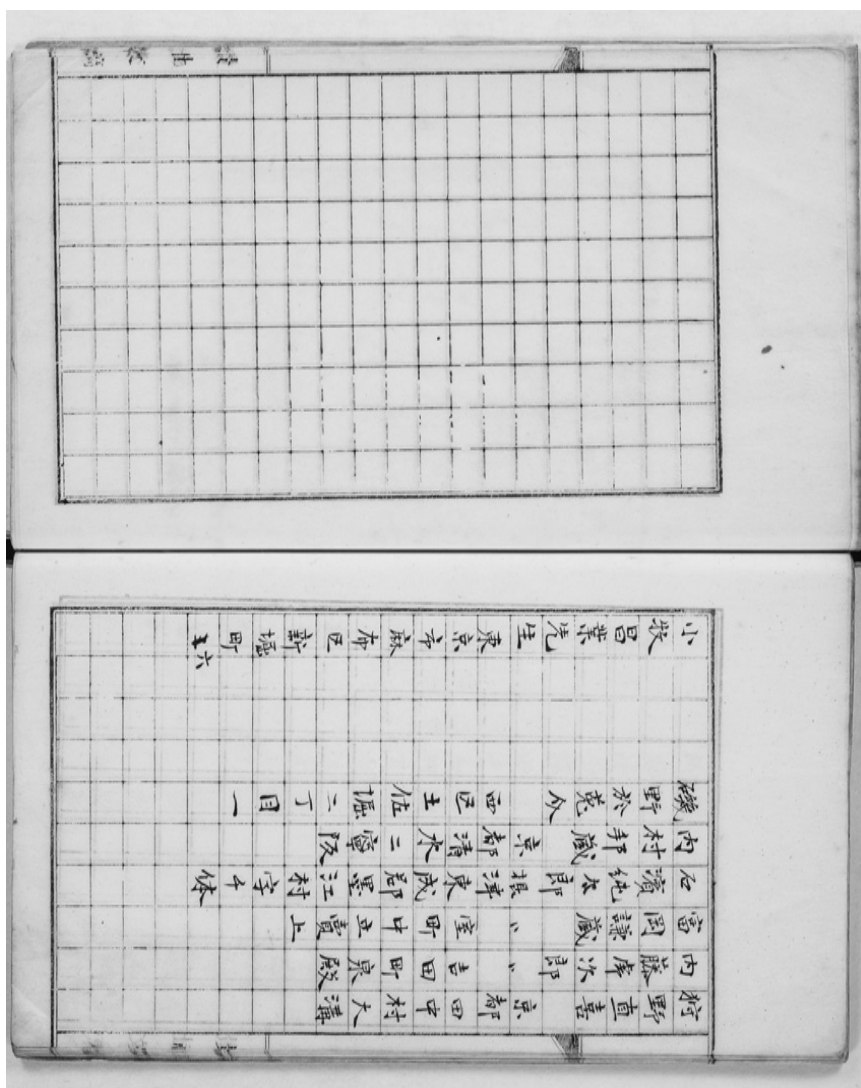


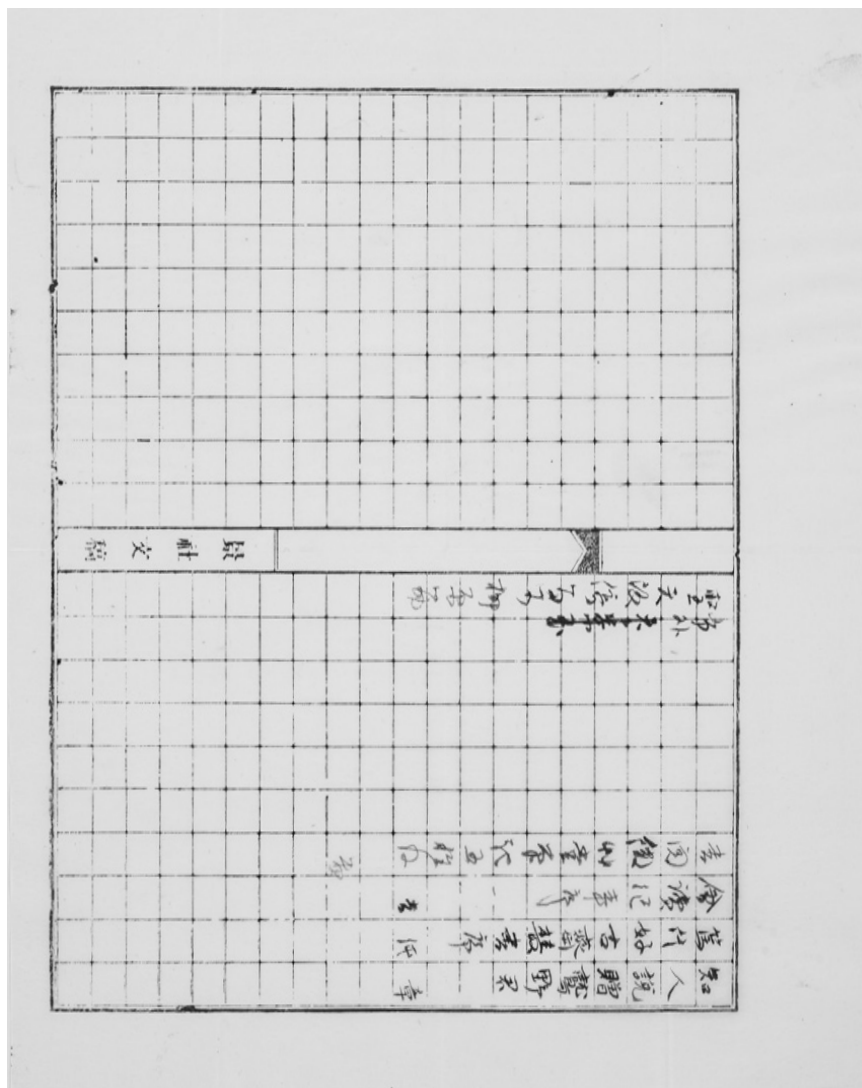




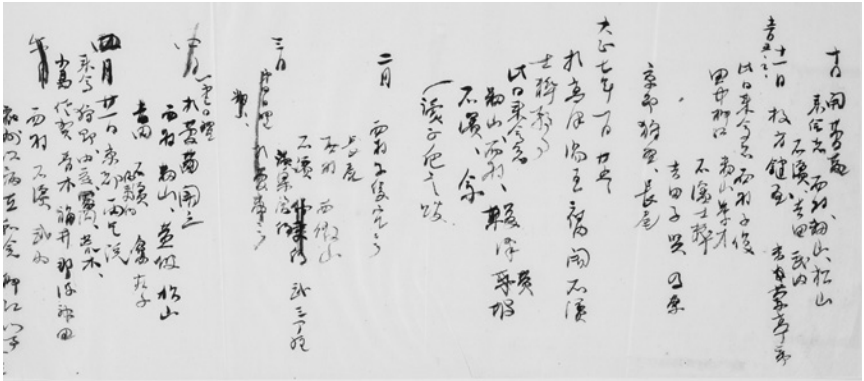


27 葉裏、28 葉表 (28 葉裏は記入なし)

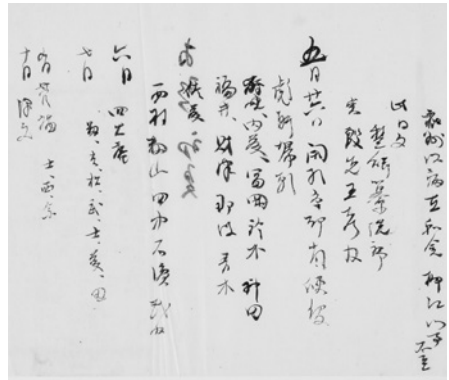




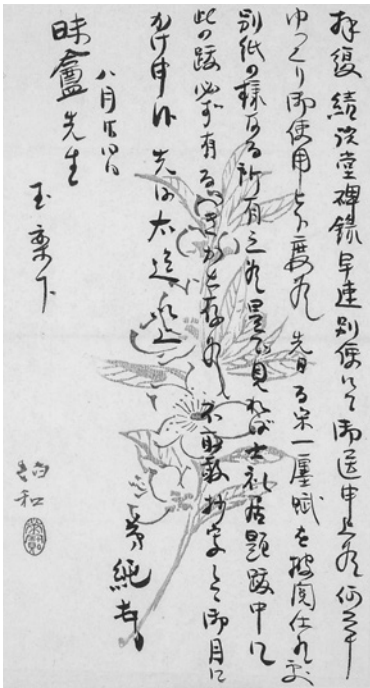
① 会合記録の書きかけ1枚



②巻紙に記された年次記録の草稿らしきもの（前半）



②巻紙に記された年次記録の草稿らしきもの（後半）



③味鑫先生あて石濱純太郎書簡

注

(本稿では、諸文献で「石浜」「石濱」が用いられている場合も「石濱」に統一した。)

- (1) たとえば近年発見された西村天因関係資料中の「景社題名第三」は、『景社紀事』(20葉表裏)等と対照すると、大正五年(一九一六)七月十六日の京都の麗澤社、大阪の景社の第三回連合会で作成されたものであることが判明する。この「題名」については湯浅邦弘「西村天因の知のネットワーク―種子島西村家所蔵資料を中心として―」『懷徳』八七号、二〇一九年、一七―一九頁、および同「石濱純太郎・石濱恒夫と懷徳堂」、吾妻重二編著『東西学術研究と文化交渉―石濱純太郎没後50年記念国際シンポジウム論文集』関西大学出版部、二〇一九年、二九〇―二九一頁参照。

- (2) 『懷徳堂記念会年表』『懷徳堂記念会百年誌』財団法人懷徳堂記念会、二〇一〇年、四四頁。

- (3) 『景社紀事』17葉裏。なお後述の拙稿「石濱純太郎は、いつ内藤湖南に出会ったのか?―新出資料『景社紀事』の紹介を兼ねて―」参照。

- (4) 『待兼山論叢・文化動態論』第五二号、二〇一八年、二一―三九頁。

- (5) 前掲の吾妻重二編著『東西学術研究と文化交渉』二九七―三一六頁所収。表1は同人二七名の氏名・通称・字號・出身・

入社年月・年齢などを載せた。なお通番十一の武内義雄の通称欄に「元造」とあるのは表の右隣りの藤澤元の通称の誤記で、訂正したい。表2「景社会合一覧」は全二六回の開催年月日・場所・幹事・出席者などを載せたが、各回の概要記述と同人が持ち寄った作品の題名は割愛している。またその注16には『待兼山論叢』所載の拙稿の訂正を載せる。

- (6) 筆者は前二稿(注4、5)の段階では翻印を予定していたが、景社同人らの筆跡をも知りうる影印を公刊することが急務と考えた。本稿は、関西大学研究拠点形成支援経費(二〇二〇―二一年度、代表…玄幸子教授)の成果である。